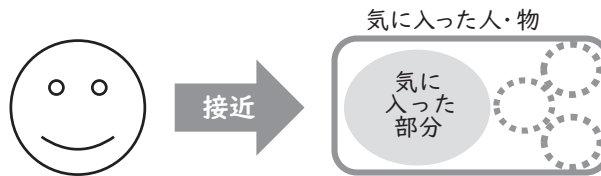


自分が好きな相手なのに攻撃してしまって、好きな相手と離れなくてはいけなくなることがあります。なぜそうなるのか、およびそうしたタイプのアンガー状態になりやすい子どもにどのような力をつけたらよいかを説明します。

1. 愛着対象に固着しがち

こだわりが強い子どもは、あるものの一部（自分が快感情を得られるもの。例えば、「形」「動き」「声」など）への固着があり、全体像をとらえていません。支援者は、まず、子どもがその人や物にアタッチする（くっついている）ことで「何を得ているか」を理解します。例えば、「気持ち落ち着く」「楽しくなる」「快感情を得る」などです。こだわりが強い子どもは、「常同行動」を起こしやすいため、気に入ったものや人を常に側においておきたい、同じ遊びをしたいと考えます。

図H



2. 愛着対象を手に入れる方法は「取り込み」(同化)

気に入った人や物を手に入れるときは、ゼロかすべて（100）かなので、そこに他のものが入ることは想定外になります。人や物を全体として気に入っているというよりも、気に入った部分とだけ同化しようとするため、他の部分は否定したり、自分の前では出せないようにします。

図I



3. 愛着対象が自分以外に向かったり、他の部分が入り込むと混乱し、不安が増大

自分が気に入った以外の部分を排除したり攻撃したりすることで、自分の「気に入った部分」のみを「所有」できる状態にしようとしています。

図J



4. 愛着対象を攻撃・破壊してあきらめる

愛着対象を「喪失」することは「自分の一部がなくなること」のため、「所有」できない場合はその対象を攻撃したり、あるいは「なくす」（破壊）することで、ゼロにしてあきらめます。気に入った人や物を手に入れるときは、ゼロかすべて（100）かなのです。

図K



【対応】

こだわりが強い子どもは、自分自身の固着や攻撃性で、大切な人たちから離れなくてはならない経験をしています。不安が強いため過去の失敗体験は振り返りたがりません。その結果、同じパターンを繰り返してトラブルが続きます。本人に、自分の行動パターンを理解してもらってから、以下の力をつける支援をしてください。

1 愛着対象を「多面的理解」するメタ認知力を育てる

なっとくのりくつ 「これをやったらどうなるかを考えよう」

「相手の立場で考えよう」

「別の可能性を考えよう」

ソーシャルスキル 「相手の話を聞く」

2 愛着対象の「主体」を「意思がある独立した存在」として認識する力を育てる

なっとくのりくつ 「それは、相手が決めること」

ソーシャルスキル 「ゆずる」「受け入れる」

「相手を尊重する」

3 愛着対象を「イメージとして保存」して、 現物がなくても「同化」してられる力を育てる

なっとくのりくつ 「それは なくならないよ」「今は、がまんだ」

ソーシャルスキル 「待つ」「不安を抱える」

4 調節する力を育てる

なっとくのりくつ 「わかりやすく伝えたら、わかってもらえる」

ソーシャルスキル 「私メッセージで気持ちと理由を伝える」

「話し合う」「提案する」など